

○「下北春まな」は下北山村の重要な地域特産物であり、古くから「春まな漬」として利用されていたが、高齢化や担い手不足により生産量が減少し、下北山村の地域特産品である「春まな漬」を周年供給できていない。そのため、下北春まなの生産量を増加させ「春まな漬」が周年供給できるようにすることが課題である。

○下北春まなは自家採種されているため訪花昆虫による他のアブラナ科野菜との交雑が懸念されている。そこで、採種圃場の改善をおこない他のアブラナ科野菜との交雑が起こりにくい対策を施した。

具体的な成果

普及指導員の活動

1. 下北春まなの生産量の増加

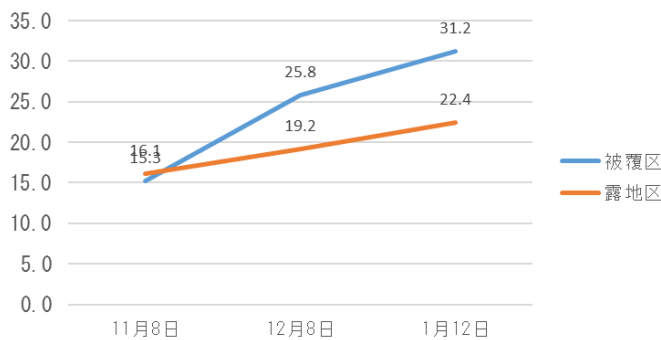
■平成28年度は平成26年度に比べ下北春まなの生産量が約1.5倍に増加した。
2450kg(H26)→3723.5kg(H28)

	平成26年	平成27年	平成28年
生産量(kg)	2495	2719	3723.5

2. 被覆資材を利用した栽培について展示圃を設置

■育苗床から本圃への移植時に被覆資材（パオパオ90）を被覆することで、通常の露地栽培と比べ生育が約1ヶ月促進した。

下北春まなの草丈（株間25cm）



3. 採種圃場の改善

■訪花昆虫による他のアブラナ科野菜との交雑を防ぐために採種圃場の改善をおこなった。



目合いの粗い既存の防虫ネットから目合いの密な新しい防虫ネットへの張り替え

■下北春まなの生産及び春まな漬の生産現状等を把握し、生産量が少ないこと及び春まな漬の保存に必要な冷凍庫の用量が不足していることが分かった。そのことから、生産者へは生産量の増加及び下北山村役場へは冷凍庫の確保を指導した。

■下北春まなの栽培技術を向上させるために栽培講習会を開催した。

講習会では適切な肥培管理及び収穫期を分散するための播種時期の分散、被覆資材の利用などについて説明をおこなった。

■訪花昆虫による交雑を防ぐために、採種圃場の既存の防虫ネットをより密な防虫ネットに張り替えるよう指導した。

■採種者の高齢化に伴い、役場が依頼した新規採種者に対して採取方法を指導した。

普及指導員だからできたこと

・高いコーディネート力を持つ普及指導員だからこそ下北春まな及び春まな漬の生産状況等を把握し、下北山村には不足している春まな漬の冷凍庫の確保また生産者には下北春まなの増産を指導し、地域の活性化につながる春まな漬の周年栽培へ誘導することができた。

・専門技術を持っている普及指導員だからこそ地域に適した栽培方法を提案し、普及することができた。

下北春まなの生産振興

活動期間：平成27年度～

1. 取組の背景

下北春まなは奈良県の南部に位置する下北山村のみで古くから栽培されてきた「ツケナ類」であり、「春まな漬」といった漬物、おひたし及び鍋料理等に利用されてきた。下北春まなは平成21年3月に奈良県の大和の伝統野菜（以下大和野菜）に認定され、下北山村の地域特産物として生産者、下北山村役場、JAならけんおよび南部農林振興事務所などの関係機関が連携しながら生産振興を図ってきた。

下北春まなは「春まな漬」、「青果」および「粉末」の3つの用途で出荷されているが生産量が少なく、春まな漬は夏季の8月頃に売り切れてしまい周年供給ができていない状況である。そこで、下北春まなの生産状況を把握し、生産量の増加をおこなった。



下北春まな



春まな漬

2. 活動内容（詳細）

- (1) 生産者及び春まな漬けの加工組織に対して下北春まなの栽培の現状及び春まな漬の生産状況の聞き取りをおこない、生産量が少ないこと及び春まな漬の保存に必要な冷凍庫の容量が不足しているため、春まな漬が周年供給できていないことが分かった。

そのことから地域の活性化及び生産者の利益に繋がる春まな漬を周年供給するために、生産者へは下北春まなの生産量の増加また下北山村役場へは春まな漬を保存する冷凍庫の確保を指導した。



生産者への聞き取りの様子



採種状況の聞き取りの様子

- (2) 下北春まなの栽培技術の向上及び新規生産者の確保のために適切な肥培管理、収穫期を分散するための播種時期の分散及び被覆資材を利用した収穫時期の分散方法などについての講習会を実施した。



講習会の様子



講習会の様子

- (3) 担当管内のJA及び下北山村役場と連携し最適な大きさで下北春まなを出荷できるように出荷規格の確認および生育の巡回をおこなった。



生育巡回の様子



出荷規格の確認の様子

- (4) ほとんどの下北春まなは露地で栽培しているため、生産者の出荷時期が重なり春まな漬の漬け込みが一時期に集中する。そのため、被覆資材を用いた生育の促進効果および被覆資材を用いた場合の最適な株間を検証するために展示圃の設置をおこなった。



展示圃の調査の様子

左：露地区 右：被覆区

(5) 採種圃場の防虫ネットの目合いが粗く訪花昆虫などによって他のアブラナ科植物との交雑の恐れがあったため、防虫ネットを密なものに交換し訪花昆虫による交雑を防いだ。また、採種者が高齢化しているため、下北山村役場が新たに採種を依頼した1名の採種者に対して、アブラナ科の自家不和合成について説明をおこなったうえで人工授粉の方法について指導をおこなった。



目合いが密な防虫ネットの展張

新規採種者の採種圃場

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 生産量の増加

2. 活動内容（詳細）のとおり活動したことにより、下北春まなの生産量は平成26年度に比べ平成28年度は約1.5倍に増加した。

生産量：2495kg（H26）→3723.5kg（H28）

	平成26年度	平成27年度	平成28年度
生産量(kg)	2,495	2,719	3,723.5

(2) 春まな漬の生産量の増加

春まな漬の生産量は平成23年度をピークに年々減り続けていたが、平成28年度は下北春まなの生産量の増加及び春まな漬を保存し周年供給できるだけの冷凍庫の容量が確保されたため増加に転じ、過去最高の生産量となった。

春まな漬の生産量：928.4kg（H26）→1372.8kg（H28）

	平成26年度	平成27年度	平成28年度
春まな漬の生産量 (kg)※	928.4	747.2	1,372.8

※南部農林振興事務所農業普及課調べ

(3) 被覆資材を用いた生育促進

育苗床から本圃への移植時に被覆資材（パオパオ90）を被覆することで被覆栽培は露地栽培に比べて約1ヶ月生育が促進することが確認した。

被覆栽培	被覆栽培			露地栽培		
	11月8日	12月8日	1月12日	11月8日	12月8日	1月12日
株間15cm	13.9	23.1	27.6	15.9	17.2	21.9
株間25cm	15.3	25.8	31.2	16.1	19.2	22.4
株間30cm	15.0	25.5	30.1	14.5	18.1	21.0
株間35cm	15.4	24.9	31.4	16.5	20.1	22.0

4. 農家等からの評価・コメント（下北山村工藤延春氏）

被覆資材の活用による生育の促進および栽培をするうえでの最適な株間が判明したので、今後は展示圃の結果をふまえて栽培をおこないたい。

5. 普及指導員のコメント

（南部農林振興事務所・主任主事・梨原嵩司）

下北春まなの生産振興を図るために関係機関が連携し、生産者の意識を高めたことで下北春まなの生産量が増加し、春まな漬の生産量も増加することができた。しかし、予想を上回る需要があったため春まな漬が周年供給できない見込みである。そのため、引き続き生産量の増加に向けて関係機関と連携しながら新規生産者の確保及び単位面積当たりの収量の増加の指導をおこなっていききたい。

6. 現状・今後の展開等

平成28年度は下北春まなの生産量が大幅に増加し、それに伴い春まな漬の生産量も増加したが、予想を上回る需要があったため春まな漬が周年供給できない見込みである。そのため、引き続き生産量の増加に向けて関係機関と連携しながら下北春まなの新規生産者の確保及び単位面積当たりの収量の増加を図っていく。

また、生産量の増加を図るうえで、被覆資材を用いた栽培は露地栽培と比べて生育の促進が確認できたことから、被覆資材を用いて露地栽培との収穫時期の分散を図り、生産者の栽培面積の拡大及び生産量の増加につなげていく。